

教職科目「道德の理論と指導法」における模擬授業： 学生が選択する「内容項目」の傾向とその理由に着目して

栗山靖弘*, 山本一生*, 浜田幸史*

Simulated Classes in "Moral Theory and Teaching Methods": Study of Trends and Reasons for Students' Choice of Content Items

Yasuhiro KURIYAMA, Issei YAMAMOTO, Koji HAMADA

Abstract

This paper examines the items that students tend to select from the "content items" listed in the Courses of Study in a mock class conducted in the "Moral Theory and Teaching Methods" teaching course. The students were asked to choose "content items" and the reasons for their choice in an open-ended questionnaire. The tendency of students to select "content items" revealed that students tend to select certain items easily compared to others. In this paper, we analyze the tendency of students to select the items based on the contents of their free response.

Specifically, the "content items" that were most likely to be selected by students were "compassion and gratitude" (30.7%), "friendship and trust" (23.9%), and "mutual understanding and tolerance" (12.5%), while the items that were not selected included "search for truth and creativity," "courtesy," "respect for local traditional culture and love for one's hometown," "international understanding and international contribution," and "inspiration and awe." As discussed in this paper, there are two types of "content items" for mock classes: those that are likely or not likely to be selected. It is also clear that the reasons for selection are largely influenced by the students' own past experiences. As mentioned earlier, all content items must be covered in a moral education class. However, it is nearly impossible to conduct a mock class on all the topics owing to time constraints. Therefore, in this paper, we have organized the issues that should be considered as examples of the content items that were selected by only a few participants.

One of the issues to be addressed in the future is the examination of reasons why students selected specific "content items." In particular, by focusing on the reasons for the choice of items, we would like to encourage students to make selections in future mock classes in "Moral Theory and Teaching Methods," and provide them with opportunities to experience mock classes based on as many items as possible.

Keywords: Moral Education in Teachers' Education, Content Items in Moral Education, Mock Lesson.

* 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

1. はじめに

本稿の目的は、大学の開放制教職課程における「道徳の理論及び指導法」に関する科目での学生による模擬授業を対象として、「内容項目」の選択傾向とその理由を検討し、模擬授業の充実を図るための方途を探ることである。具体的には、鹿屋体育大学における2020年度後期開講の「道徳の理論と指導法」における模擬授業を対象として、上記課題の検討を行う。

中学校における「特別の教科 道徳」の授業では、4領域22項目の「内容項目」を扱うことになる（『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』, pp.24-25, 以下『解説編』と略記する）。そして、この「内容項目について、各学年において全て取り上げることとする」（『中学校学習指導要領』「第3章特別の教科 道徳」「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」）とされている。

また、教職課程コアカリキュラムにおいては、「(2) 道徳の指導法」の到達目標として「(6) 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている」（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, 2017）ことが示されている。そのため、「道徳の理論と指導法」においても、「内容項目」の選択をもとにした模擬授業を実施した。

しかしながら、22の「内容項目」のすべてについて模擬授業を実施するには、時間の面でも人的資源の面でも限界がある。特に、教員養成系の学部ではない、開放制教職課程においては、場合によっては100名を超える受講者全員に模擬授業を実施させなければならないという状況がある。鹿屋体育大学の「道徳の理論と指導法」においても同様の状況である。

一方で、教職に就いた場合には、22の「内容項目」を全て扱うことが求められていることから、中学校の授業ではすべての項目に触れておく必要がある。そのため、教職の授業のなかで、各項目に関する説明を行うのはもちろんだが、他の受講

者は自分が選択した以外の「内容項目」に基づいて、どのような模擬授業を展開しているのかを知ること、で、「内容項目」への理解を深めることができる。

2. 先行研究の検討

道徳の「内容項目」に関する先行研究では、個別の「内容項目」に注目して、学校での授業実践の方法を考察する研究が多い。例えば、「家族愛」（中村・藤井, 2016）, 「自由」「自律」（中村・藤井, 2017）, 「国際理解」（広岡, 2017）, 「よりよく生きる喜び」（増井, 2018）, 「郷土」（永田ほか, 2020）, 「畏敬の念」（山田ほか, 2020および光田, 2021）などがあげられる。

一方、「内容項目」全体を調査に基づいて研究しているケースは少数である。ここでは、これらの研究を検討することで、本稿の立場を明確にしておきたい。

酒井ほか（2018）は、教員養成段階の大学生の道徳意識について、質問紙調査を用いて明らかにしている。特に、中学生に必要な道徳意識を検討した部分は本稿にとって示唆的である。優先すべき道徳意識の上位3つを尋ねた結果、「④思いやり, 感謝, 信頼」（147件）, 「⑨生命の尊さ」（85件）, 「節度, 節制」（59件）が入っていたという。一方で、「⑧国際理解」（3件）, 「⑩感動, 畏敬の念」（10件）, 「⑦家族愛, 郷土愛」（14件）については選択するものが比較的少ない状況にあることが示されている（酒井ほか, 2018）。

次に、柄本（2014）は、先行研究の知見とデータを用いて、教員養成課程の大学生が重視する「内容項目」を明らかにしている。具体的には、「内容項目の重点的な指導を計画・実施する際に、強く影響力をもつと考えられるのが、『人はどのような項目を心理的に重視しているのか（重点化しているのか）』という、内容項目への態度」について、大学生と教師、一般成人の比較を行っている。その結果、「『思いやり・親切』のように対象を問わず共通して重視される項目もあれば、対

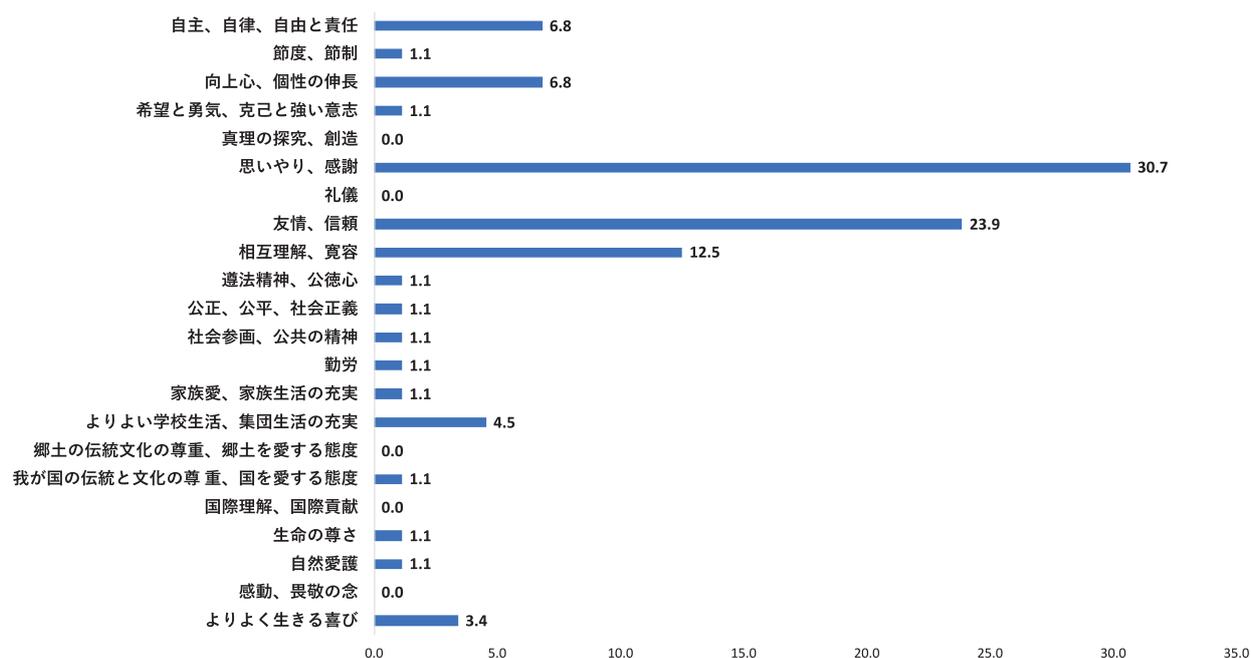


図2: 学生の選択した「内容項目」(N=88,%)

たる教材は『中学道徳2 きみがいちばんひかるとき』(光村図書)のなかから選択することとした。教材内容の概要を示すため、本教材の目次を以下に示しておく。

模擬授業後には、グループのメンバー(生徒役)からの反応がわかるよう、コメントシート^{註1)}を準備し、模擬授業者にメールで送る形で、フィードバックを行った。

ただし、2020年度の模擬授業は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、遠隔会議システムCisco Webexを用いて実施した。

3-3. データ

「道徳の理論と指導法」の受講学生(145名)に対して、Webclass(大学向けe-Learningシステム)のアンケート機能を用いて調査を実施した。まず、22の「内容項目」について、択一式で回答を求め、続いて自由記述で選択した「内容項目」の選択理由を尋ねた。有効回答数は88件であり、回収率は60.7%^{註2)}である。

4. 「内容項目」に対する学生の選択傾向

本節では、学生がどの「内容項目」を選択して

模擬授業を実施する傾向にあるのかについて検討する。

図2は、学生が選択した「内容項目」の分布を示している。図2から学生の選択傾向を以下の3つに分けた。このように分けた理由は、学生が多く選択する項目および比較的少ない項目、および選択した学生がいない項目に分けて、それぞれの特徴と選択理由を考察するためである。

第1に、学生が比較的、選択しやすい項目である。「思いやり、感謝」(30.7%)、「友情、信頼」(23.9%)、「相互理解、寛容」(12.5%)であり、この3項目で全体の7割近くを占めている。第2に、学生の選択傾向としては比較的少ない項目、および選択した学生がいない項目である。例えば、「自主、自律、自由と責任」および「向上心、個性の伸長」(それぞれ6.8%)、「よりよい学校生活、集団生活の充実」(4.5%)、「よりよく生きる喜び」(3.4%)、「遵法精神、公德心」「公正、公平、社会正義」「社会参画、公共の精神」(ともに1.1%)などがこのグループに該当する。

このように、学生が選択する「内容項目」には重なりが見られる。試みに、こうした傾向は、現職の教員が研修等で発表する際の選択傾向と比べ

表1: 研究大会で教員が選択した内容項目 (件)

内容項目	全中連	ブロック
「自主, 自律, 自由と責任」		
「節度, 節制」		
「向上心, 個性の伸長」	1	1
「希望と勇気, 克己と強い意志」		1
「真理の探究, 創造」	1	1
「思いやり, 感謝」	5	1
「礼儀」		2
「友情, 信頼」		
「相互理解, 寛容」	1	
「遵法精神, 公德心」		
「公正, 公平, 社会正義」	7	2
「社会参画, 公共の精神」	1	1
「勤労」		4
「家族愛, 家庭生活の充実」		2
「よりよい学校生活, 集団生活の充実」		
「郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度」		
「我が国の伝統と文化の尊重, 国を愛する態度」		
「国際理解, 国際貢献」	1	
「生命の尊さ」		1
「自然愛護」	2	
「感動, 畏敬の念」		
「よりよく生きる喜び」	1	1
・空欄は0件を表す。 ・出典: ・全日本中学校道徳教育研究会ホームページ https://zencyudo.webnode.jp (2021.7.20) 令和元年10月24日(木)・25日(金)第53回全日本中学校道徳教育研究大会鳥取大会 第4回中国中学校道徳教育研究大会鳥取大会 令和元年11月8日(金)～9日(土)令和元年度第54回北海道研札幌大会 令和2年9月8日茨木市立養精中学校 令和2年11月11日(水)吹田市立第三中学校 令和2年11月11日摂津市立第三中学校 令和2年11月11日島本町立第一中学校 令和3年11月11日～11月30日(ネット配信は12月3日まで)第55回全日本中学校道徳教育研究大会沖縄大会 第47回九州地区道徳教育研究大会沖縄大会 ・なお, ここで取り上げるのは, 全中道ホームページ(2021年7月21日閲覧)で公開されているもののうち, 「内容項目」を明確に把握できるものを算出した。どの「内容項目」に該当するのかが明確に把握できない発表については, 算出の対象としていない。		

た場合に, 重なる部分(「思いやり・感謝」と重ならない部分(「友情・信頼」「公正・公平・社会正義」と)があることもわかった。

表1は, 「特別の教科 道徳」として教科化された2019年度～2021年度に行われた全日本中学校道徳教育研究会(以下, 全中道と示す。)研究大会全国大会及びブロック大会における公開授業での「内容項目」の選択傾向を示している。この表から, 図1同様に選ばれやすい項目と, 選ばれにくい項目に分かれる傾向にある。なお, 学生の選

択傾向と現職教員の選択傾向にズレが生じた原因の考察は今後の課題としたい。

5. 「内容項目」の選択理由—自由記述の回答から—

実際に, 項目の選択理由では次のような記述があった。

5-1. 自分の経験等に基づいた選択理由(「思いやり, 感謝」「友情, 信頼」「相互理解, 寛容」より)

- ・「自分が今まで経験した中で1番大事だと考えたものだから」
- ・「自分の経験から」
- ・「身近なものだったから」
- ・「友達や信頼については中学生が直面しそうな問題だと自分自身の経験から感じていたので選択した。」
- ・「私自身も中学生の頃にクラスの友達や部活動の仲間といざこざがあったため, 自分と置き換える意味でも選択しました。」
- ・「自分も, 同じような体験をしたことがあったから。」
- ・「今回中学生の道徳の授業の指導案を考えるにあたって, 自分が中学生のころを思い出して, 中学校の時思春期で自我が強くなり相手の意見が素直に聞けなかったり, 尊重できないということがありました。そういった心の変化を基に今回この項目を通じて生徒たちにどうゆう考え方をしたら良いのかを伝えようと思いこの項目を選択しました。」

(下線部は引用者による。以下同じ。)

学生が初めて道徳の模擬授業を行うことを想定した場合, 自分の経験をベースにすることが, 学生にとってイメージのしやすさにつながっている。その結果, 模擬授業の項目として選択されたと考えられる。また, より直接的に「授業のしやすさ」を理由としてあげている学生もいた。

5-2. 「授業のしやすさ」に基づいた選択理由（「思いやり, 感謝」「友情, 信頼」「相互理解, 寛容」より）

- ・「やりやすそうだったから」
- ・「授業をしやすいテーマだと思いました」
- ・「模擬授業を進めるにあたって、みんなが身近に感じるテーマだと感じたから。また、導入しやすい^{註3)}と思ったから。」

「授業がしやすい」という判断を下すことができるということについても、学生が何らかのイメージを持つことのできる項目だからだと考えることができる。そのため、「授業のしやすさ」も、これまでの経験に影響を受けた結果としての項目の選択であると解釈できる。

5-3. 「内容項目」ごとの選択理由

もちろん、自分の経験や「授業のしやすさ」以外の理由もあげられている。ここで代表的なものを紹介しておきたい。

5-3-1. 「思いやり, 感謝」の選択理由

- ・「中学生の時は思春期というのもあり、思いやりというのが恥ずかしいとかそういうのがあるので思いやりについて理解を深めることが大切だと思ったからです。」
- ・「感謝を伝えることは当たり前なのですが、伝えることは恥ずかしいし照れくさいものです。」
- ・「中学生は良いと思ったことも恥ずかしくてやれない、というような時期だと思います。しかし、自分が良いと思ったことは堂々とできる人になってほしいです。」
- ・「中学の時期は様々な人と関わるので思いやりについて考えてほしいと思ったから。」
- ・「今、思いやりを持って行動することや思いやりの理解が異なっている人が多いので、道徳の授業を通して思いやりについて考えてみ

たいと思ったから。」

- ・「思いやりの心を大切にすることができれば、いじめ問題の解消に少しずつつながっていくと考えるからです。」
- ・「現代社会の問題として考えた時に、いじめや誹謗中傷などの問題が挙げられた。そのため思いやりや、感謝の気持ちを養うために選びました。」

「思いやり, 感謝」の選択理由として注目すべきなのは、中学生が「思いやり」や「感謝」を伝えることを「恥ずかしい」「照れくさい」と感じることを前提として選択している学生がいることである。このことは、『解説編』の「指導の要点」に照らしても重要な選択理由である。

学年が上がるにつれて、自立心の強まりとともに、日々の生活の中で自己を支えてくれている多くの人の善意や支えに気付く一方で、家族など日常的に接している人々に対し、支えられていることを有り難いと思いつつも、疎ましく感じたり、感謝の気持ちを素直に伝えることの難しさを感じたりしている。特に、自分の存在に深く関わることになると言葉や行動としてうまく思いやりや感謝の気持ちを表現できないこともある。

（『解説編』, p.37）

中学生という時期的な特性を踏まえたうえで「思いやり, 感謝」の授業を考えることで、より充実した授業実践につなげることが可能になる。

「様々な人と関わる」ことや「思いやりを持って行動することや思いやりの理解が異なっている人が多い」ことは、多様な人々との関わりを前提とした選択理由である。この点については、次に取り上げる「友情・信頼」の選択理由とも重なる部分が大きいので、併せて議論したい。

数は少ないものの、いじめとの関連において「思いやり, 感謝」を選択する学生もいた。今般

の指導要領改訂が「いじめ問題への対応」(『解説編』, p.3) を求めていることは広く知られている。「生徒がこうした現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成していく上で、道徳教育も大きな役割を果たすことが強く求められ」(『解説編』, p.3) ていることから、道徳の授業を通じたいじめ問題への対応は、今後とも深めていくべきテーマであろう。ただし、いじめ問題への対応を考えた場合には、「思いやり、感謝」だけでなく、「友情、信頼」や「よりよい学校生活、集団生活の充実」「生命の尊さ」等の項目とも関連するテーマであるため、道徳教育全体で考えていく必要があることを意味している。

5-3-2. 「友情、信頼」の選択理由

- ・「「友情」は、共感や信頼の情を抱き合って互いを肯定し合う人間関係であるが、それは全ての友人にあるものではない。小学校から中学校へ進学すると、必ずと言っていいほど新たな人との出会いがある。」
- ・「中学生の時期は、部活が始まり、他地域との学校合併^{註4)}により人との接する時間が増えます。この人との関わりが大切になる時期に友達や信頼について学ぶことで、高校、大学と社会に出たときの人付き合いに活かすことができると考えたからです。」
- ・友達という存在をいろんな視点から見て欲しかったから。

「友情、信頼」の選択理由として重要なのは、小学校から中学校への移行にともなう生活環境や人間関係の変化という意味での学校段階の違いが意識されていることである。「新たな人との出会い」や、複数の小学校出身者が同じ中学校で生活を始めることなど、生活環境の変化を視野に入れたうえでの項目の選択が行われている。

5-3-3. 「相互理解、寛容」の選択理由

- ・「中学2年の道徳授業の設定ということで、

人との関わりが多くまた思春期で人間関係に悩みやすいと思うので、人と接する中で大切な相互理解が必要だと思ったからです。自分の思い優先ではなく、相手の立場から物事を考えられるようになること、相手を受け入れられることが大切になると思いました。」

- ・「自分の気持ちを相手に伝えるということも勿論そうだが、色々な物事に対してなんでも伝える努力や、相手の事を理解する事が大切だと思ったから。

自分たちだけの物事の見方だけが全てではないということを経験した。」

このように、自分の経験や「授業のしやすさ」だけでなく、思春期の特性や多様な人々との関わりが選択理由としてあげられている。

5-4. 本節のまとめ

本節での検討から、学生がもっている、これまで学校で受けてきた道徳の授業に対するイメージが、「内容項目」の選択傾向に影響を与えていると考えられる。特に、多くの学生が選択した「思いやり、感謝」「友情、信頼」「相互理解、寛容」は、「授業のしやすさ」や「教材の選びやすさ」という理由から選択されたと考えられる。

もちろん、ここでの選択理由は、主たる教材である教科書の影響を受けている可能性がある。しかし、本稿では「道徳の理論と指導法」の授業内で実施した模擬授業と「内容項目」の選択に基づいて考察しているため、当該教科書以外は用いていない。教材内容との影響関係については他の教科書と比較する必要があると考えるが、この点については今後の課題とする。

また、本節以下の学生の選択理由の引用は、本文ママとした。

6. 選択者が少なかった項目

本節では、選択者が少なかった項目とその選択理由をとりあげる。その際、主だった項目と選択

理由を紹介したい。

●「自主, 自律, 自由と責任」の選択理由 (6人: 6.8%)

- ・学生設定を中学2年生したので, 部活動で後半からリーダー的な存在になって後輩を引っ張っていかねばならなくなるため, テニス部の危機という題材をつかって, 自主, 自律, 自由と責任という内容を伝えて部活動での思いの違う生徒との関わり方を考えて欲しいと思い, この題材を選びました。中学生ではじめて部活動を始めるという人も多いと思ったため, 3年生が引退して, 2年生が部活動を引っ張っていくようになるため, そこで悩んでしまわないようにこの題材を選びました。
- ・中学生を対象として授業を考えたので, 今後社会に出る人や高校へ進学する人など進路が分かれる中で, 自分のことは自分で管理しなければいけなくなると感じたので, 「自主, 自立, 自由と責任」の内容項目を選択しました。

●「向上心, 個性の伸長」(6人: 6.8%)

- ・中学生の多感な時期に, 自分自身の個性や相手の個性について理解しておくべきことや, 進路選択等に向上心を持っておくことが必要だとおもったから。

●希望と勇気, 克己と強い意志 (1人: 1.1%)

- ・最近の子供たちは自分への価値観を自分で下げてしまっているように感じます。それは, 周りの言葉や, 周りと比較しすぎて起きてしまっていることだと思います。成長するにつれて悩む内容は変わっていくが, その中で自分を見つめ直し, そして自分を認めて一歩踏み出す気持ちを忘れないでほしいという思いからこの主題を設定致しました。

●「家族愛・家族生活の充実」(1人: 1.1%)

- ・最近 SNS などの通信ツールなどを使う人が増えており, 家族との時間だったりが減る人が多いと感じました。だから, 原点に戻って, 家族の大切さを改めてわかって欲しいなと思ったのでこれにしました。

●「自然愛護」(1人: 1.1%)

- ・私は環境についての題材を選びました。近年環境問題が悪化しているのでそこに中学生のころから触れていることが大事なのではないかとおもったのでこの課題にしました。

●「よりよく生きる喜び」(3人: 3.4%)

- ・人として生きていく上で, 苦労や挫折を味わうことはあると思う。そんな時, 他人と比べるのではなく, 自分の良さやできることなどの自分自身を見つめ直すことにより, 前に進むことができたり, 勇気を持つことができると思う。中学2年生はこれから先, 様々な選択をしていき, 様々な壁に打ち当たると思う。そのような壁を自分自身で乗り越えられる力をつける必要がある。自分のことを見つめ直し, より良い生きる喜びを選択した。

7. 選択者がいなかった項目

図1によると, 選択者がいなかった項目は, 「真理の探究, 創造」「礼儀」「郷土の伝統文化の尊重, 郷土を愛する態度」「国際理解, 国際貢献」「感動, 畏敬の念」の5項目であった。選択の際には選ばなかった理由を述べるよう求めていなかったため, 選ばなかった理由は不明である。また表1によると, 現職教員においても「自主, 自律, 自由と責任」「節度, 節制」「友情, 信頼」「遵法精神, 公德心」「よりよい学校生活, 集団生活の充実」「郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度」「我が国の伝統と文化の尊重, 国を愛する態度」「感動, 畏敬の念」は選択者がいなかった項目である。また, 先行研究でも「国際理解」「感動, 畏敬の念」

「家族愛, 郷土愛」という3つの項目の選択者が少なかった(酒井ほか, 2018)。図1と表1の双方で選択者がいなかった項目が「郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度」(以下「郷土項目」と略記する)と「感動, 畏敬の念」(以下「畏敬項目」と略記する)の2項目である。

これらの項目は先行研究でも選択者が少なく, また学生も教員も選ばなかった理由として, 「郷土項目」は「愛国心」と同様に個々人の所属意識と直結した課題であり, それゆえ取り扱いにナイーブにならざるを得ないという点が考えられる。「畏敬項目」は, いかにか公教育で宗教性を払拭するかが課題となるため, 学生も教員も扱うことにためらいがあると考えられる。

そこで本節では, 特に「郷土項目」と「畏敬項目」についての具体的解決案として, 扱うべき論点を提示する。その際, 指導案作成を目標とするのではなく, 教職科目である「道徳の理論と指導法」でそれらの論点を扱うことによる「内容項目」の網羅を目標とする。

7-1 「郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度」についての考察

まず, 「郷土項目」について考える。「郷土」について, 『解説編』では以下のように定義している。

「郷土」とは, 自分の生まれ育った土地ないし地理的環境のことである。また, 郷土とは文化的な面を含んでおり, 自らがその土地で育てられてきたことに伴う精神的なつながりがある場所を示している。(『解説編』, p.56)

すなわち, 郷土は地理的概念であると同時に, 人間関係によって構築された文化的側面を有するのである。「郷土」の類義語として「地域」という語がある。『大辞林』では「区画された土地の区域」と定義しており, 「地域」はあくまで地理的概念に留まることに「郷土」との違いがあ

る。「郷土」には「精神的なつながり」が求められているように, 帰属意識の観点が求められている。帰属意識という個々人の内面の「道徳的価値」に関わるからこそ, 道徳教育として「郷土」を扱うことが求められているのである。しかし同時に, それゆえに「郷土」を扱うことは帰属意識を求める「愛国」と同様に, 政治的な先鋭化を招く難しさがある。そのため学生や教員が積極的に取り組むことに高いハードルを感じていると言える。その難しさの事例として, 鹿児島県での郷土教育があげられる。1970年代後半から80年代を通じて県教育行政の中核として「郷土教育」の体系化が進められた。薩摩藩政時代の「郷中教育」の理念を再評価し, この理念に基づく「山坂達者」が推進され, 道徳心の育成が目指された(杉浦, pp.108-109)。一方で鹿児島県教職員組合も1960年代から郷土学習実践を展開するなど, 組合側も郷土教育自体を否定しなかった。そのため, 思想的な対立は明確だったものの, 実践のレベルでは対立が見えず, 曖昧さを抱えたまま後の時代に継承されていった(杉浦, pp.108-109)。このことは, 政治的対立が不可視化されたまま郷土教育が展開するという難しさを示している。

他に郷土教育の実践例としては, 滋賀大学教育学部附属中学校での取り組みがある(永田ほか, 2020)。その特徴は, 「総合的な学習の時間」である「BIWAKO TIME」と, 道徳を連携させたことである。さらに4象限マトリクスなどの思考ツールを活用することで, 生徒の「郷土」に対する意識を多面的・多角的に考察する授業展開を提示した。興味深いことに, 生徒の中には授業実践を通じて郷土を世界へ羽ばたくための土台と捉え, 必ずしも国家の枠に収まっていない見方が提示されていることである。

以上の検討から, 政治的対立に注意しつつも, 地域における具体的な課題を教材として提示することで, 「郷土」を自分事として捉えるように導くことの重要性が指摘できる。この前提に立てはじめて, 「郷土」という道徳的価値を通じて生

徒の自己を見つめる学習を促し、人間としての生き方の考えを深めるように導く（高宮, p.36）ことができよう。

7-2 「感動, 畏敬の念」についての考察

畏敬の念について、『解説編』では以下のようにある。

「畏敬」とは、「畏れる」という意味での畏怖という面と、「敬う」という意味での尊敬、尊重という面が含まれている。(略)人間としての自己の在り方を深く探究するとき、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じ取る心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるだろう。(『解説編』, p.66)

このように、「人の生き方」に対する「畏敬の念」が求められているところに今般の改訂の特徴がある。この改訂によって「自然愛護」と「感動, 畏敬の念」が別の項目となり、従来の自然から「人の生き方」にまで「美しいものや気高いもの」の範囲が広がった。さらに、『解説編』にある「人間の力を超えたもの」という文言は自然や芸術作品との対比に留まらず、人間の生き方そのものに見出されるものとして提案された（山田ほか, pp.62-64）。山田ほかは坂本達氏の著作を教材化し、人と人をつなげ、人間を生かし、さまざまな出会いをもたらす「大いなる力」を感じる授業実践を報告した。その際、「親切」と「畏敬の念」という二段階構成を取った。この方策により、わかりやすい道徳的価値と対比することで、抽象的で理解が難しい「畏敬の念」へと連続的に捉える流れを提示した。一方で、宗教性のない「畏敬の念」がどこまで「畏敬の念」となり得るか、と重要な問題提起をしている（山田ほか, p.69）。なお、道徳の授業実践においては、「人の生き方」のな

かに「人間の力を超えたもの」を「感じ取る」ことの重要性についての説明は必要となるだろう。

一方で、教職課程受講者の「畏敬の念」の教材分析や学習指導案作成に対する苦悩が、むしろ子どもたちの豊かな学びにつながる可能性を、ボルノーの「羞恥」概念から導く試みがある（光田, 2020）。知覚も表象もできないにもかかわらず人間が向かい合わざるを得ない「存在論的な概念」と対峙し、それが突きつけるアポリア、すなわち解決の糸口すら見いだせないような難問を問う。その方策として教材「カーテンの向こう」（『中学道徳 心をつないで3』, 教育出版）を事例に考察し、子どもたちがアポリアを問い続けるように学習活動を支援することを求めている。

以上の点を踏まえれば、宗教性という非日常を排し、日常生活の中で「畏敬の念」というアポリアを自分事として生徒に促す教材選びが今後の道徳教育において重要となる。

7-3 考察を踏まえた今後の授業展開

本稿で考察してきたように、模擬授業における「内容項目」の選択には、学生に選択されないものがある。今後は、模擬授業を授業のなかで早め実施し、授業最終回等で選択されなかった項目の概要や学習指導案を示したい。そうすることで、「内容項目」の漏れを補うことになり、より広く「内容項目」全体を理解することができると思う。

8. おわりに

本稿で検討したように、模擬授業の実施における「内容項目」の選択には選ばれやすい項目と選ばれにくい項目がある。そして、選択の理由には、学生自身のこれまでの経験が大きく影響していることがわかる。冒頭で述べたように、中学校での道徳の授業では全ての「内容項目」を扱わなければならない。しかし、教職課程での限られた時間のなかで全ての項目をテーマとした模擬授業を実施することは不可能に近い。そこで本稿では、選

択者が少なかった「内容項目」を事例に扱うべき論点を整理した。

今後の課題として、「内容項目」に対する学生の選択理由の検討があげられる。特に、選んだ学生の少ない項目の選択理由を中心に検討することで、今後の「道德の理論と指導法」における模擬授業での選択を促し、できるだけ多くの項目に基づいた模擬授業に触れる機会を設けたい。

付記: 本研究で使用したデータは、鹿屋体育大学研究倫理審査小委員会の了承を得て実施した調査に基づいている。

註

- 1) 「コメントシート」には、模擬授業を受けたうえで「よかった点」「改善すべき点」「自分ならこうする」の3点の記入を求めた。その際、「授業改善を目的として実施するため、模擬授業者の人格を否定・非難するようなことは書かない」よう事前に指導を行った。
- 2) オンライン授業のなかで実施した調査であるため、回収率は若干低くなっていると考えられる。
- 3) 当該学生は「授業が実施しやすい」という理由で「内容項目」を選択している。したがって、「導入しやすい」という記述も、模擬授業における「導入・展開・終末」における「導入」部分がやりやすいという意味で用いていると考えられる。
- 4) 「同じ中学校に複数の小学校出身者が集まる」という意味である。

文献一覧

- ・酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎 (2018) 内容項目に基づく「道德意識」に関する検討: 教員養成段階の大学生に対する調査. 静岡大学教育実践総合センター紀要28: 47-57.
- ・杉浦ちなみ (2020) 1980年代の「郷土教育」をめぐる論争と実践: 鹿児島県を事例に. 教育学

研究87(4): 106-117.

- ・高宮正貴 (2020) 価値観を広げる道德授業づくり = How to broaden values for life: 教材の価値分析で発問力を高める. 北大路書房.
- ・柄本健太郎 (2014) 教員養成課程の大学生が重視する内容項目とは: 教師と一般成人との比較. 道德と教育58(332): 27-38.
- ・永田郁子・山下亮 (2020) 生徒が課題を主体的に見出す「特別の教科 道德」の授業研究: 郷土を愛する態度の育成を中心に. 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要62集: 108-115.
- ・中村美智太郎・藤井基貴 (2016) 道德教育における内容項目「家族愛」に関する基礎的研究. 静岡大学教育実践総合センター紀要25: 11-20.
- ・中村美智太郎・藤井基貴 (2017) 道德教育における内容項目「自由」「自律」に関する基礎的研究. 静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇48: 75-87.
- ・広岡義之 (2017) 「特別の教科 道德」における内容項目「国際理解」の一考察: 読み物教材「海と空~檜野の人々~」(エルトゥール号遭難事件)を具体例としつつ. 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要3: 45-53.
- ・増井眞樹 (2018) 主体的・対話的で深い学びが期待できる「考える道德»: 新内容項目「よりよく生きる喜び」の実践. 人間教育1(1): 1-13.
- ・光田尚美 (2021) 道德教育の存在論的地平. 近畿大学教育論叢33(1): 1-18.
- ・山田真由美・杉本泰範・山田浩之・小路美和 (2020) 中学校道德科における「感動, 畏敬の念」の授業: 「人間の力を超えたもの」をどのように扱うか. 北海道教育大学紀要. 教育科学編71(1): 61-75.
- ・教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 教職課程コアカリキュラム.